

[3] 次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

1 けしからず物ごとを祝ふ者ありて、与三郎といふ中間に、大晦日の晩言ひ教へけるは、「今宵はつねよりとく宿に帰り休み、あすは早々起きてきたり、門をたたけ。内より『誰そや』と問ふとき、『福の神にてさふらふ』と答へよ。すなはち戸をあけて呼び入れん」と、(Ⅰ)言ひ含めてのち、亭主は心にかけて、鶏の鳴くと同じやうに起きて、門に待ちあひり。案のごとく戸をたたたく。「誰そ、誰そ」と問ふ。「いや、与三郎」と答ふる。無興なかなながら門をあけてより、そこもと火をともし若水を汲み、糞をすゆれども、亭主顔のさまあしくて、さらに物言はず。中間不審に思ひ、つくづく思案しみて、宵に教へし福の神をうち忘れ、(Ⅱ)酒をのむころに思ひ出だし、仰天し、膳をあげ、座敷を立ちぎまに、「さらば福の神でござある。おいとま申し参らす」と言うた。

【語注】 注1 中間……武家奉公する者をいうが、ここは商家に使われる下男のこと。

注2 若水……年のはじめにはじめて汲む水。邪気を払うと信ぜられた。

注3 糞……あつもの。雑煮のこと。

### 【現代語訳】

なみはずれて何かと縁起をかつぐ者がいて、与三郎という下男に、大晦日の晩に言いふくめたことには、「今夜はふだんより早く家にもどって休み、あすは早いうちに起きて来て、門をたたけ。家の内から『だれかね。』とたずねるから、そのとき『福の神でございます。』と答えよ。そしたらすぐに戸をあけて呼び入れよう。」と、(Ⅰ)言い聞かせたあと、亭主は心にかけて、鶏の鳴くと同じように早くから起きて、門のところまで待ちかまえていた。すると、予想どおりに戸をたたたく。「だれか、だれか。」と問う。「いや、与三郎。」と答える。亭主はひどくきげんをそこねたけれど、門をあけてやると、そこにあかりをつけ、若水を汲み、雑煮をととのえて祝いの膳を据えたが、亭主は冴えない顔つきで、(Ⅱ)下男はふしぎに思い、つくづくと思案していたが、昨夜亭主の教えた福の神のことを、すっかり忘れていたのを、(Ⅲ)祝いの酒をのむころに思い出してびっくりし、食事をすませて、座敷を立ちぎまに「(Ⅳ)おいとま申しあげます。」と言った。

問一 線部ア「さふらふ」、イ「やうに」について、それぞれ現代仮名遣いに直し、ひらがなで答えなさい。

問二 線部1「けしからず物ごとを祝ふ者」というのは、ここではだれのことを指していますか。原文中から抜き出して答えなさい。

問三 空欄Ⅰに入れることばとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① いたづらに                      ② ねんごろに  
③ かりそめに                      ④ やすらかに

問四 線部2「顔のさまあしくて」の理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① 亭主を待たせたから。                      ② 亭主に「誰そ」と二回言わせたから。  
③ 中間の答えようが悪かったから。                      ④ 門をあけても、中間がすぐにはいつてこなかったから。

問五 — 線部3「さらに物言はず」、4「さらば福の神でござある」の現代語訳として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号をマークしなさい。

3 「さらに物言はず」

- ① さらに続けてものを言う。
- ② まったくものを言わない。
- ③ ことさらものも言わない。
- ④ それだけしかもものを言わない。

4 「さらば福の神でござある」

- ① それなら、福の神が御着座になります。
- ② それなら、わたくしは福の神でございます。
- ③ それゆえ、福の神がこれから出かけます。
- ④ それゆえ、福の神のお通りでございます。

問六 空欄Ⅱに入れることばとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① はやくも
- ② もとより
- ③ ひとへに
- ④ やうやく

問七 この話の直後の亭主の様子はどのようであったと想像されるか。最も適当なものを次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① ますますきげんが悪くなった。
- ② 中間にふきげんな顔を見せたことを反省した。
- ③ やれやれよかったと安心した。
- ④ きげんを直して中間をほめた。